

太陽が消えた あの日

——被爆を語る

長崎放送報道部・編



太陽が消えた あの日

——被爆を語る

長崎放送報道部・編

大川悦生・解説



童心社

若い人の図書館

太陽が消えたあの日

昭和47年 8 月10日 第1刷発行

昭和58年 4 月25日 第7刷発行

編：長崎放送報道部

発行：株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話 (357) 4181 (代) 振替東京1-75504

製 版：株式会社第一製版所

平版印刷：小宮山印刷株式会社

活版印刷：次 賀 印 刷 所

製本：株式会社田中製本所

四六判・18.7cm・224P・ND C 910.4

Printed in Japan.

若き友の屍焼かむと

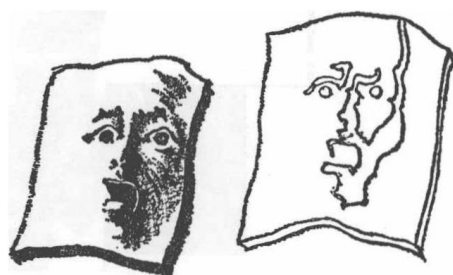
原子野に

柱組みたる

あの日忘れじ

小谷幸子





傷ついた私のあゆみ——ひとりの娘の体験 ● 片岡ツヨさんの話…………… 7

顔を閃光がうった^な…………… 10 みじめさをかみしめながら…………… 30

ひとつきりの欠けた鍋…………… 20 職場のこと手術のこと…………… 35

はじめて鏡を見たときに…………… 25 ささやかなひとつの願い…………… 41

あの子をさがした二十一日——ひとりの母の体験 ● 林津恵さんの話…………… 47

九日の朝、子どもは…………… 49 「あ」と呼んだくちびる…………… 63

浦上の焼け野の道で…………… 54 主人の死まで…………… 67

でもまだ、あの子はどこかに…………… 59 城山の庭に桜を…………… 71

城山で直美を抱いて——ひとりの教師の体験●江頭千代子さんの話……77

イモ畑の運動場……79

長男も死に主人までが……103

子をおろそうとしたそのときに……84

間借りで再開された学校……107

恐怖で声がでなかった……88

涙で終った卒業式……111

主人に手をひかれて……92

重いあゆみの日々……115

目で見た地獄……98

無縁仏の千羽鶴……118

広島を見てきて長崎で——ひとりの徴用工員の体験●川崎一郎さんの話……123

被爆の翌日広島駅を……125

だれも知らない原爆症……138

ああ、同じ爆弾だった……129

六度も入院して……143

やっと五島についてから……134

乙女らの訴えを世界に——ひとりの女学生の体験●渡辺千恵子さんの話……151

気がついたとき私は……153

ふたたび死をのがれたあとで……168

被爆者収容所の夜……155

世界の母親大会に私の手記を……175

母とふたりきり残って……160

六人の原爆乙女……182

腐った肉と肺炎と……164

苦しくて運動のなかでこそ……189

原爆被爆者問題の資料……196

被爆を民族の体験として……208

歴史への責任をはたすために……219



解説＊大川悦生

1930年，長野県に生まれる。早大
史学科卒業。「民話を語る会」
「東京のむかしを聞く会」を主宰
している。主な著書に「日本民話
読本」「おかあさんの木」「山の
かあさんと16びきのねずみ」等多
数。東京在住。

イラスト＊吉田克二

1938年，長崎市に生まれる。小学
二年生のとき被爆。長崎大学教育
学部美術科卒業。現在長崎市土井
首中学美術教諭。

装幀＊広瀬 郁

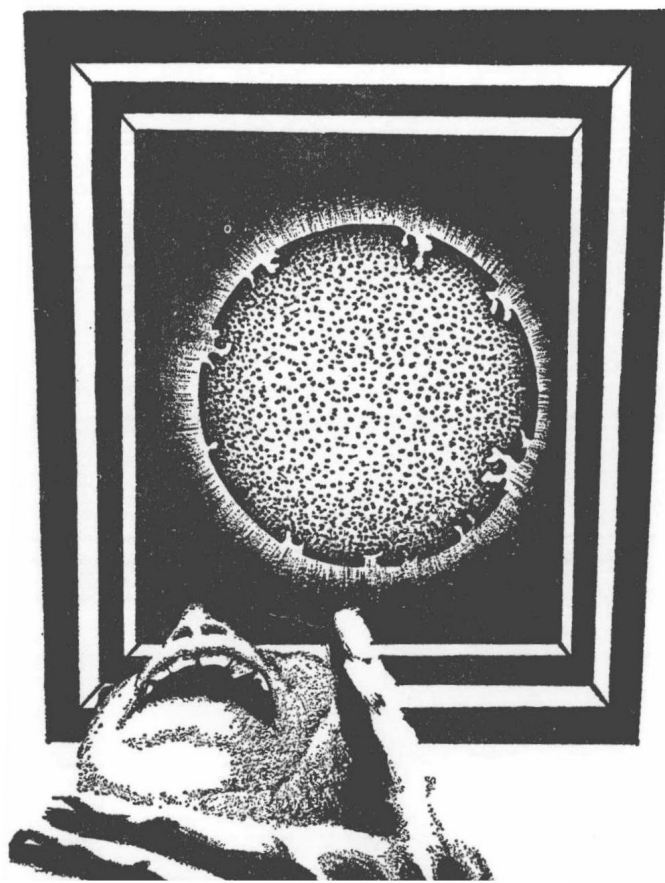
写真＊宮崎皓一

太陽が消えた あの日

——被爆を語る

長崎放送報道部・編

大川悦生・解説





● 傷ついた私のあゆみ——ひとりの娘の体験
● 片岡ツヨさんの話

片岡ツヨさん

長崎被爆を「神の試練」と受けとめるカトリックの被爆信者が、浦上うらかみの地には、すくなくない。片岡ツヨさん（一九二一年生れ）もそのひとりである。

片岡さんは、原爆で家と家財道具のいっさいを失い、自らも傷つき、ケロイドの残るからだで、いま長崎大学医学部付属病院で清掃婦として働いている。

昭和三十九年、母親が亡くなってからは、ひとり暮らしである。

自分が死んでも、だれにも気づかれないのではないかと、職場の友人に、「私が二日以上、連絡せんと休んだら、死んどつとじゃけん、すぐにしらべてくれんとね」と頼んであるんですよ。でも、なんとか七十歳ぐらいまで、生きたいもんですね。」という。

あれからもう二十何年という時が過ぎてしまったのですね。

私をふりかえってみると、あの原爆のために結婚もできなかったし、これだけ傷をうけて、しばらく目が見えんようになったり、顔にはケロイドが残って、病氣も出て、のぞみがなかったのですよ。

二回ほど私のことを新聞に載せてくださって、求婚きゆうこんのような申し出をいただいた方がありましたが、自分が弱いからだをもちながら結婚してはいけない、同情的にそういうふうにしてくださる方に甘えられないという気持ちがありましたね。

もう結婚したところで、私にどんな子どもが与えられるかわからない。この苦しみを自分だけひとりで耐たえていけばいいのじゃないか、この苦しみを子孫にのこしてはいけないのじゃないかと思ってですね、会わんまえにおことわりしてきました。結婚すれば、やっぱり私だって子どもが欲しいし、授さづけてもらいたいと思いますでしょ。それではいけない、死んでいくにも、

「ああね、自分だけひとりでこの世をたっていったらよかたい。」



という気持ちからですね、結婚をのぞみませんでした。ほんとに、あの原爆のおかげですね、不具ふぐになって、結婚どころか、ただ生きるのにもがいてきましたね。

~~~~~

顔を

私が原爆を受けたのは、かぞえて二十四歳の年でした。

閃光がうつた！

~~~~~

そのころ、三菱兵器の鋳物場いものばに徴用めいようで勤めておって、三カ月かそこらでしたけど、鉄くずみたいなものをかますにつめて倉庫に運搬うんぱんしておったんです。トラックの大きいのに、積んだりおろしたりするのに、私もついておったわけです。

「勝つまではがんばらんと、工場も戦場と同じだぞ。」

そう上の人からいわれるまんまに、身を粉こなにして働いておりましたとですよ。

八月九日——その日はね、何時ごろ空襲くうしゅうだったか、防空壕ぼうくうごうに退避たいひしまして、解除かいじょになったのが八時半かそれくらいと思っております。ほんとは三菱兵器も八時半からの仕事ですけど、その日は遅れても入れてくれて、九時ごろ鋳物場にはいりました。

行くときは食糧難で、うめぼしを弁当に入れて、うめぼしだけがおかずでしたけ

ど、そういうふうにしてその日も持っていました。それで、モンペ姿に防空頭巾^{ずきん}でしょ。自分でつくった足袋^{たび}をはいて、はきものは鉄くずがささるとあぶないから、下駄^{げた}にわらぞうりを打ちつけたようなのをはいておったです。

仲間の人が二、三人おりまして、仕事にかかって時間もたって、お昼にもうすこしというところだったんでしょう。あとで聞くと、十一時二分の投下ですから。暑い日だったもので、「暑かね」というて、私は軒下^{のきした}にちょっとかごんだんです。そして、その、音がして、

「あれ、工場の雑音じゃろうか。そいばってんが、爆音やろうか。」

というて、私は見たんです。外のほうをね。その瞬間、もう落下してるんですね。そして、あの、むちで顔をピタッピタッとやられるような強い明りがして、たたかれたような状態でした。

私はからだごととばされて、どこにとばされたかわからず、はきものももうはないで、逃げるつもりになって横を見ると、いっしょにおった人がコンクリート建物の下じきになりましたね、

「助けてくれんね、助けてくれんね。」

というけど、私ももう人を助けるどころではありませんです。

はつきり申します。もう恐ろしさとなんとていっばいになってしまつて、それでも、その被爆をしたときにはですね、三菱兵器だけと私は思っております。

男の人の声で、「退避せろ」というのを、何回か聞きましたけど、なかなか逃げだせずに……というのは、鉄筋がつぶれて横たわつて、またがっていくのが容易ではありませんでした。やっとそこを越えて、三菱兵器の社内を逃げだして、横のほうにたんぼがありまして、そのたんぼをどういふふうにして走つていったか、それもわかりません。無我夢中なんですね。

川のところに行きましたら、そこはもう生き地獄でした。血どり真赤になって、血を洗っている者もおるし、そこらじゅう唸り声で、ほんと修羅の声ですね。そのときの人びとの声は、口や筆でいいあらわすことができません。そして、もうみんな血どり真赤になって、血を洗ったり、水を飲んだり、行き倒れたまんまになっている人もおるし、そうするところを、私はやっぱしとびこえて逃げました。人間が人間をとび越えていく、そんな言葉のとおりでありさまだかったです。

そのとき、ああ、自分はけがせずによかったねと、ほかの人のように血が流れておらないために、「ああ、自分はねえ、ほんと、けがせずによかった」と思っていました。そしたら、そのうちに、なんかくすばり、臭いような感じがするんですよ。

いかにも自分が燃えたような、燃えてくすばるようなにおいがするんです。まだ私は、頭が焼けるということも無我夢中でわからなくて、たださっき顔がむち打たれたような、ピタッピタッという光で打たれたのが、記憶するかぎり、あんな痛みを感じたことは二度とないでしょうね。

逃げながら、私はふと気づいたみたいに、自分の姿をふりかえって見ました。そして、膝ひざの下から、両方のモンペがもぎ取られまして、皮が、この、たらーっとさがっておるんですよ。

「あらあ、なんしたとやろかね。」

私は、自分がやけどしたと思いませんしね、あらあ、皮のはげてしもうとるねえと思うて見たのが、よく見ると、焼けて皮がはげて、ぶらーっと、着物なんかといっしょにさがっておりますもんね。それまで無我夢中で痛みを感じなかったんです。

川から自分の家のほうを見ますと、三菱兵器だけとってたのが、町全体がやられてしもうておりますでしょ。道ばたに大きな松の木もあったのが横倒れになっていて、私はそれをくぐったり、枝がふさいでいるのをくぐったりまたいだりして行きました。途中では、知った人が私に、

「うちのとうちゃんは、どがんしとらすやろか。見らんかったね、ねえちゃん。」
 ていうて、その泣き叫ぶ声ですね。親は子を求め、子どもは親を求めて、そういうふうな、もうなんていいか、うまいこといいあわせませんけど、ほんと生き地獄になっとるんですね。

途中で見た情景はですね、世の中をこうひっくり返して、土埃つちぼこりをたてられるだけたてたというんですか。黒でもなし、黄色でもなし、赤でもなし、何色ぐらいの色だったでしょうか、黒赤黄をませあわせたような、もうどんな色だったかということ、口ではいえません。とうてい、どんなにいいか、息のつきにくい、息でもとまるようなね、ありさまだったと私は思います……。

やっと自分の家の付近にたどりついたと思うときには、ぼうぼう近所が何軒も燃えておりました。

自分の家も倒れてしもうておりますし、そのそばに、母がぼんやりしまして立っておるんですよ。

「ああ、よかったね。助かってよかったね。どぎゃんしとったと。」
 ちゅうたら、母は、

「おいは、下じきになったとたい。今やっと、ねえこら、あのまえかけもしとっと